

本多静六通信

第15号

発行
本多静六博士
を記念する会

本多静六が設計した

室蘭公園は戦争で消滅

専修大学北海道短期大学名誉教授 依 浩三

鉄の町として有名な北海道の室蘭市、その都心に近く、「室蘭公園」があった(図1、2)。しかし、いまやその存在を知る市民は少なくなり、まして、それが本多静六によってマスタープランが立てられたことは、ほとんど知られていない。



本多静六博士

古い北海道の観光ガイドブック、例えば大正十四(一九二五)年に発行された『北海道鉄道各駅要覧(札幌鉄道局)』には、室蘭公園が次のように記されている。「(室蘭)市の南東公園町の高丘地二万八千坪の地積を占め、近く繁華な室蘭市街及び港湾を眼下に俯瞰し、遠く有珠岳・駒ヶ岳の山影を一望の裡に収め、眺望雄大すこぶる景勝の地で、鬱蒼たる森林の中、所々に東屋の設けがあり、夏期行遊納涼の好適地である。大正十一年、公園隣接地三千余坪を平坦にして運動場を設けた他、天然の樹林、山景を利用して、各種近代施設を加えることになっている。」

室蘭は、明治初期はわずかな戸数の集落だったが、明治二十五(一八九二)年に岩見沢(苫小牧)室蘭を結ぶ鉄道が開通してから、空知炭鉱(岩見沢周辺)の石炭積出港として栄え、さらに日露戦争後の明治四十(一九〇七)年に日本製鋼所、四十二(一九〇九)年に新日本製鉄があいついで立地すると、鉄の町として発展する基盤ができた。そこで室蘭町(当時)は公園がほしいと考え、本多静六に公園計画の立案をお願いした。本多はすでに明治三十二年ころ東大の北海道演習林(富良野市)の設営や、大正三年に大沼公園改良案を手がけるなど、何回か北海道に足跡を記していたが、室蘭を訪れたのは大正五(一九一六)年で、このときは釧路公園の調査・立案も同時に行われた。

大正五年八月、本多は室蘭公園予定地の調査を終え、室蘭公会堂で関係者を前に公園設計の方針を講演したが、その記録が『室蘭公園設計ノ大要(室蘭町役場発行)』として残っている。それによれば、本多はまず工業都市や港町では、空気の汚れた工場で働く工員や大海原の航海で緑に飢えた船員が心身をいやすため、とくに公園が必要なことを説明、室蘭の公園予定地は高みの丘陵地なので、イギリス風の自然風景式造園とすべきことを説いた。その上で、丘陵を車で一周する大回遊道路と、それから派生する枝道を設け、眺めのよい峯に眺望説明図つきの展望台を配置すること、公園入口付近に並木を植え、水を生かした修景を行い、奥の平坦地を得やすい地形の場所に、花卉園、鹿林、さらに運動広場を設けること、また樹林を手入れし、苗圃を設けることなどを提案した。なお公園区域は土地所有関係を考慮しつつも、権利制限にとらわれず、あるべき姿を提示した。

これを受けた室蘭町は、付近の町名を「公園町」と改名し、乏しい予算の中から、道路や展望台など、公園施設の整備を少しずつ進め、昭

和六（一九三一）年には市役所（室蘭町は大正十一年市制施行）庁舎を公園隣接地に移した。昭和十六年には公園を充実させるため室蘭公園改良計画も立案したが、翌十七年、室蘭市で最初の公園として都市計画決定されたのは、中島公園と祝津公園で、意外にも室蘭公園の名はなかった。

それは昭和十六（一九四一）年に始まった太平洋戦争に起因していた。室蘭市都市計画課の中塚治幸さんが、市役所OB、とくに野田克也さん（元図書館長）に伺ったところによると、室蘭は軍艦や兵器生産の重要な拠点なので、太平洋戦争が始まると同時に防備の必要から、室蘭公園一帯が軍関係の施設用地として接収された。そして樹木伐採と公園施設の撤去が行われ、一般市民は立ち入り禁止となり、公園機能が停止した。また戦後は、食糧不足や燃料不足に悩まされた市民が、残っていた樹木を薪に伐ったり、自家用農園としたが、戦後の混乱の中で市役所による管理ができず、さらに荒廃が進んだという。

こうして室蘭公園は消滅してしまっただが、室蘭市の公文書には、室蘭公園の消滅経緯を記した文書が残っていないという。また室蘭市の市街の発展とともに、平坦地の乏しい室蘭公園より、運動競技施設などを整備できる平坦地の公園の需要が大きくなり、また展望台ないし風致公園としての役割は、測量山や地球岬など、室蘭公園より資質のすぐれた場所が近づき易くな

り、室蘭公園の相対的な地位が低下した。それに土地利用の競合も生じた。そうしたことから戦後は室蘭公園が復活しなかったらしい。なお当時はまだ都市公園法がなく、公園の存在は、法的にも社会的にも弱い時代だった。



旧室蘭公園の入口部分の道路（本多が並木整備を提案した所）

いま、室蘭公園のあった場所を訪ねてみると、旧公園入口の横には大きなスパーマーケットができ、丘陵地の下部は、斜面の地形を削って造成された土地に住宅や学校などが建ち、本多がパノラマ展望台や東屋の適地とした峯は、電波の送受信塔があつて、近づけない。本多の『室蘭公園設計ノ大要』の面影を感じさせるものは、大回遊道路の一部が舗装道路となっているのと、旧公園隣接地の運動場（冒頭に引用した方

イドブックに大正十一年に造成されたと記されているもの）が、市民グラウンドとして使用されている程度である。第二次大戦後はほとんど裸だったという樹林は、落葉広葉樹林としてよみがえりつつある部分もあるが、林の下はササが生い茂り、散策を楽しめる環境ではない。また室蘭市役所のあつた場所は、現在はNHK室蘭放送局となっている。



旧室蘭公園の中心部（本多が展望台や東屋を提案した峯には電波送受信塔が建っている）

JR室蘭駅は平成九年、市街地再開発事業により旧駅舎から六百ほど東南に移り、旧室蘭公園入口は駅から至近距離となった。本多が推奨したパノラマ展望台の峯が使えないのは残念であるが、せめて散策路の一部は整備・復活してほしいと願うものである。

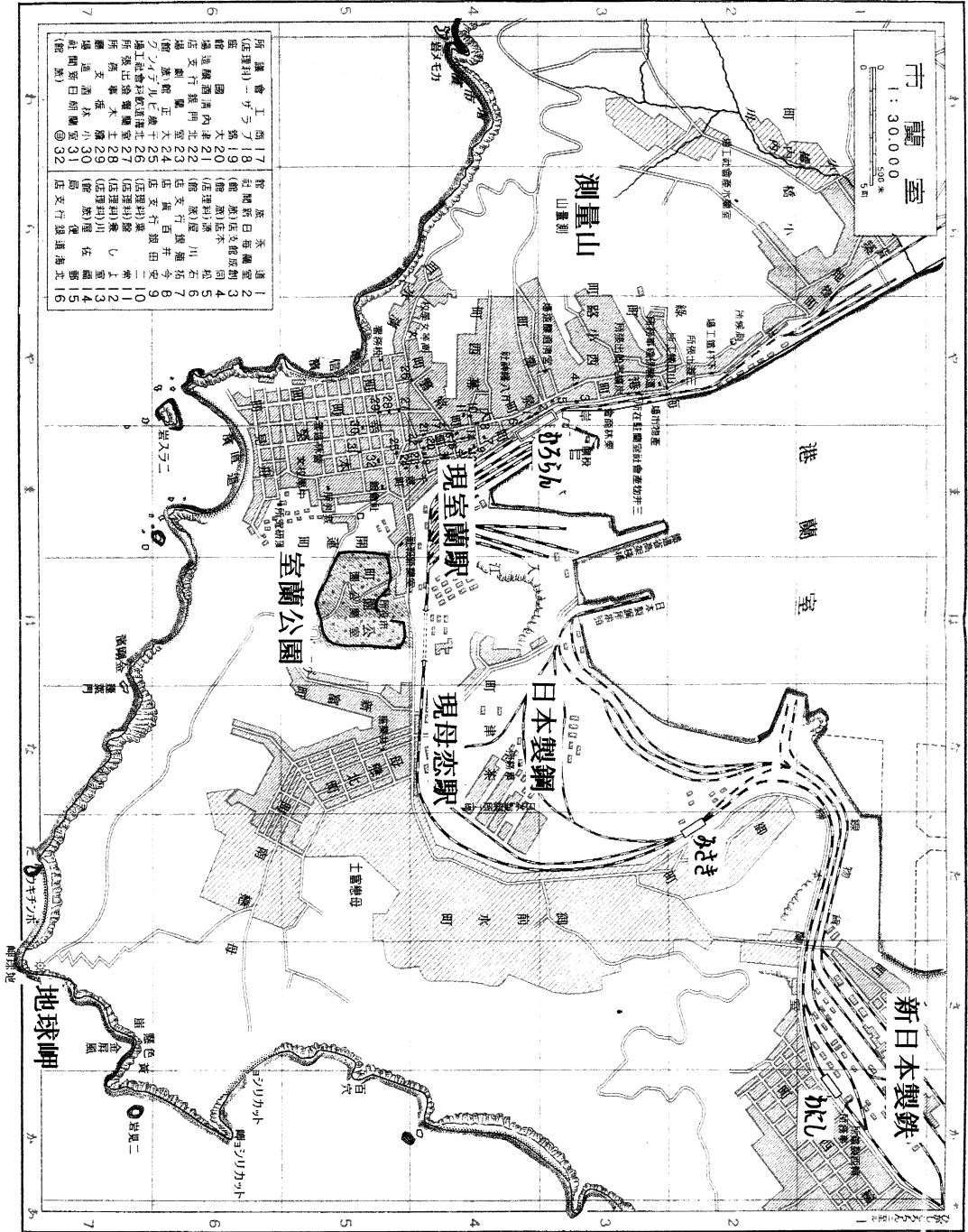


図1 昭和10年ころの室蘭市街略図(『日本案内記・北海道編』鉄道省、1936)
 中央部に室蘭公園があったが、現在は存在しない。
 母恋駅は昭和10年開設であるが、まだ地図には記載がなかった。
 室蘭駅は平成9年、旧駅より600mほど東南に移転した。

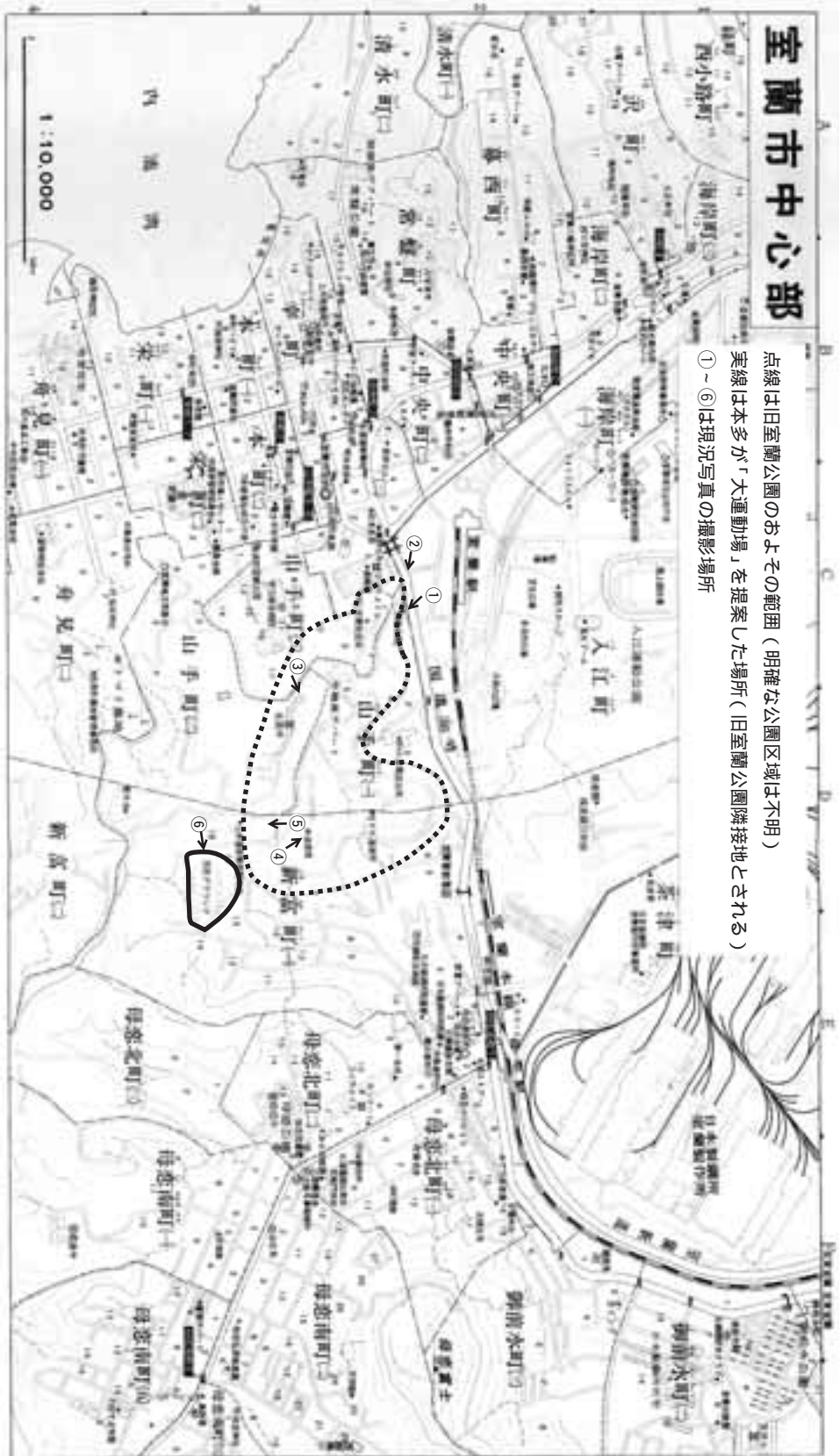


図2 旧室蘭公園の現況地図

旧室蘭公園の現況写真



① JR室蘭駅前駐車場から旧室蘭公園の丘陵地を望む
(現室蘭駅は旧室蘭駅より約600m東南に移動した)



②旧室蘭公園入口付近 「P」の看板右手が公園入口だった。左側の道路は国道36号、右手の大きな建物は長崎屋



③旧公園用地の一部を土地造成して建てられた北辰中学校校舎背後の丘陵が旧室蘭公園



④旧室蘭公園の中心部 本多が展望東屋を推奨した峯には電波受信塔が建っている



⑤旧室蘭公園の「牛屋峠」と呼ばれた付近 本多が花卉園や鹿林を提案した場所



⑥現在も運動広場として使われる市民グラウンド 本多が大運動場を提案した場所。大正11年公園隣接地に造成されたという、写真左上の遠景は母恋富士と呼ばれる山

「本多静六の足跡」取材こぼれ話

お茶の水女子大学名誉教授 遠山 益
聖学院大学教授

本多静六とその娘婿三浦伊八郎の業績をまとめておこうと思いつてから、かなりの年月が経つ。このため大学図書館はうに及ばず、地方都市の図書館、二人が関係した山林や公園、あるいは交流をもつた人々から、可能な限り資料を集めつつある。筆者は永年自然科学の研究職にあつたので、自分の眼で確認し、耳で聴き、

全身で理解することを執筆前の必要条件としている。

これまで本州の北端から九州まで取材の旅をして、今もなおその途上にある。この間に新しい発見があり、その土地の人々の温かい人情に

触れ、彼らとの交流を楽しみながら続けている。これらのことがこの取材を一層有意義なものにさせてくれる。

取材と執筆を続けている間に、思いもよらず森林文化協会から「本多静六の足跡」について、執筆してほしいとの依頼を受けた。森林文化協会とは、緑の環境問題に熱心な朝日新聞社が、創立百周年記念事業の一つとして、今から二十六年前、社内につくった組織である。協会では月刊誌「森林文化 グリーンパワー」を発行している。筆者が本誌に「本多静六の足跡」を連載し始めてから三年目に入っている。

ここでは本誌からこぼれ落ちた話題や、一般社会で本多が誤解されている一面、あるいは、今なお本多の人間性を高く評価し、その業績に深い敬意を表する地方都市など、こぼれ話のほんの一部を紹介したい。

◇ ◇ ◇
本多を話題にすると、「赤松亡国論の本多静六」の標題で、赤松亡国論を本多を紹介する枕に使われることが少なくない。しかし、この内容を詳しく検討すると、いくつかの行き違いや誤解があるように思われる。

なるほど、森林生態学では赤松林は第三期林相とよばれ、その土地は乾燥し衰弱している。この状態が続くと国土は荒廃して、洪水と旱魃の害に見舞われ、亡国につながるというわれている。すなわち国土生産力の衰退は赤松が優勢になるか否かで説明できる。

本多はこのことを「わが国地力の衰頹と赤松の關係」と題して、東洋学芸雑誌に発表した(明治三十三年)。すると高山樗牛氏はあの論文の内容は重大であるから、私の主宰する雑誌「太陽」に転載したいといってきた。承諾すると彼は太陽誌上に「赤松亡国論」という標題にして掲載した。

本多自身が書き残した資料には、このいきさつが上記のようになっていた。ところが明治三十三年から高山樗牛が他界した明治三十六年までの「太陽」を検索したところ、赤松亡国論は全く見当たらなかった。これはいつたいたことだろうか。本多の記憶違いか、高山の手違いか。

「赤松亡国論」という語句は、本多の門弟市島直治が「熊沢蕃山の松之説と赤松亡国論(明治三十五年)」と題する論文に使ったのが、恐らく最初のものである。本多自身は明治四十三年頃から、各地の講演会でこの語句を使い始めている。詳細は別の機会にゆずりたい。

◇ ◇ ◇
大正五年、本多は会津が生んだ東京帝国大学総長山川健次郎氏の依頼で若松城址公園の設計



「赤松亡国論」の顛末が記されている『本多静六体験八十五年』(本人著)



鶴ヶ城公園（福島県会津若松市）

をひき受けた。若松城（鶴ヶ城ともいう）は東北地方切つての名城である。筆者の関心事は、設計により植栽した樹木である。それらは百年近い大樹に成長している。

自治体が管理運営する公園は各都市の顔である。公園を構成する大切な要素である樹木にも留意すべきであるが、見過ごしている公園が少なくない。まして樹木台帳などはつくつてないところが多い。金がない、人手がない、のではなく、発想の貧困に由来するところが大きい。若松城の例を紹介しよう。

以下、ボランティアの公園ガイド佐藤恒雄氏の言葉である。「ある年の七月半ば頃、城に近い鶴城小学校の六年生が公園内にグループ学習にやってきた。『お城の植物』のテーマのグループは私の所にきました。スギ、マツ、ケヤキ、サクラなどはわかりませんが、わからない樹木も少なくありませんでした。小学生たちに触発されて園内の樹木の名前、樹齢、大きさなど、写真に収めながら学習することになりました。園内に約五千本の樹木があつて、そのうち推定樹齢百年以上のものは約百五十本あります。これら樹木のほとんど全部台帳に整理しました。」

筆者は佐藤恒雄氏がまとめられた「鶴ヶ城公園樹木調査表」を見せて頂いたことがある。ボランティア精神に徹して、御苦労を厭わず、この細かい仕事を完成されたご努力に頭が下がった。城内の推定樹齢八百年のケヤキ、六百年のモミは圧巻である。これらの古木は会津の歴史の生き証人として、これからも若松城の栄枯盛衰を見守ってくれるだろう。

◇ ◇ ◇

本多静六の名を知らないのは、普通の現象であろう。本多の生まれ故郷に隣接した都市の役所職員数名に尋ねたところ、本多の名を知る人は一人もいなかった。以下に述べる例は、むしろ例外なのかもしれない。

長野市と千曲川をはさんだ隣接の小都市に須坂市という魅力的な町がある。須坂のキャッチフレーズは「糸の町」、「蔵の町」、「臥竜山がりゅうさんの町」

本多静六と臥竜公園

臥竜公園は、長野県須坂市にある公園で、大正15年（1926）本多静六により設計されたものである。設計案の中で本多は、公園整備の必要性について、「都市では自動車等の交通機関や工業の発達により、人々の生活は人工的・機械的となり、塵埃と喧騒のため不健康の状態に陥っている」、それを改善するには公園が必要で、「公園のない街に住む人は、窓のない家に住むのと同じである。衛生上大害がある」と述べている。また、地方都市において公園を整備することは、「都市としての発展を促すばかりでなく、地方文化の普及・発展にもつながるものだ」といっている。

次頁の写真は、臥竜公園の造成中及び完成後の写真である。

である。明治維新以来、日本の近代化を支える程繁栄した須坂の蚕糸業で、町全体活気に満ちていた。その時代市街地にある臥竜山を公園化する事になつて、本多はその設計を担当した。臥竜山は美しい樹幹の赤松林で、これらの自然を生かし、麓には大きな竜ヶ池を掘り、その周囲には桜を植栽するという計画である。園内の桜は約八百本、当時植栽した桜は樹齢七十年を超えている。当然、日本桜の名所百選に選ばれている。

須坂市民は挙つて臥竜公園を誇りとし、これを愛し、護り、育てる気風に溢れていた。それゆえ、これを設計した本多静六の名も広く知られていた。これら市民に支えられる限り、臥竜公園の名はこれからも汚れることはないだろう。因に三木正夫市長の名刺の表面には、満開に咲き誇る臥竜公園の桜が、裏面には名勝臥竜公園（本多静六博士設計）とある。



臥竜公園・竜ヶ池築造工事のようす



臥竜公園・竜ヶ池築造工事のようす（弁天島の前で）



臥竜公園・竜ヶ池築造工事竣工後のようす（現 動物園入口から）



臥竜公園・竜ヶ池築造工事竣工後のようす（現 動物園入口方面を望む）

（写真はいずれも須坂市立博物館所蔵 『『須坂いま・昔』一映像で振りかえる製糸業全盛期の須坂と今』より転載）

環境セミナー

「代々木の杜」に学ぶ

「二十一世紀の森づくり」に参加して

菅蒲町 柴崎 一

このセミナーのねらいは、本多静六博士の百年の計によって造られた代々木の杜「明治神宮」が平成十七年に八十五周年を迎えるにあたり、大都会に位置し、人の手によってつくられた鎮守の杜が、世界的に注目されている現状を踏まえ「都市環境の象徴」「自然の美」について、

地域の環境保全の立場から考えたいとして特定非営利活動法人、EFE総合研究所が企画運営して開催されたものです。
※ EFE総合研究所は「循環型社会」の構築を目指し環境の保全と改善のために活動する研究所とのこと。

セミナーは、去る平成十六年十一月二十日（土）江戸東京博物館一階大ホールにおいて開かれ、菅蒲町から八名の方が参加、自然環境の保全の大切さを肌で感じさせられました。
初めは本多静六博士の孫にあたる東京大学名誉教授の本多健一先生による「明治神宮と本多静六」と題した基調講演でした。博士の菅



〈代々木の杜〉に学ぶ21世紀の森づくり
EFE総合研究所

日時：平成16年11月20日（土）午後13:00-4:30
会場：江戸東京博物館 大ホール / 東京都豊島区旗本1-4-1 TEL: 03-3502-4014

1:30——開場 受付 高橋幸雄（江戸東京博物館学芸員）
1:35——開演挨拶「明治神宮と本多静六」
講師：本多健一（東京大学名誉教授）
（伊藤）

2:20——社会環境と自然「森の響」
講師：小久保 篤（東京大学名誉教授）

2:45——パネルディスカッション「明治神宮と21世紀の森づくり」
司会者：代々木の杜の物語・明治神宮」制作/制作
（司会者）：内藤 廣（法政大学名誉教授）、石本丈夫（法政大学名誉教授）、
菅生 博（伊藤）、沖澤幸二（法政大学名誉教授）
コーディネーター：齋藤宏保（法政大学名誉教授）、菅生博（伊藤）

4:25——「アオハス」パフォーマンス
4:30——閉会

主催：特定非営利活動法人 EFE総合研究所 江戸東京博物館 東京都立総合文化センター
後援：東京都豊島区、法政大学、東京大学、東京理科大学、東京農工大学、東京女子大学、
東京海洋大学、法政大学、東京大学、東京理科大学、東京女子大学、東京海洋大学、
東京都立総合文化センター、法政大学、東京大学、東京理科大学、東京女子大学、
東京海洋大学、法政大学、東京大学、東京理科大学、東京女子大学、東京海洋大学

特定非営利活動法人 EFE総合研究所
〒104-0064 東京都中央区銀座1-10-4 TEL: 03-3204-4546 FAX: 03-3204-4204
東京都豊島区旗本1-4-1 TEL: 03-3502-4014

(EFE総合研究所提供)

蒲町河原井での生い立ち、志を立てて上京して島村家の書生となり、苦学の末、本多家の婿養子となつて金四千元を買ってドイツへ留学、のちに日本初の林学博士の学位を取得、母校東京大学の教授となる生い立ちの記、月給の1/4を貯金するなどして貯えた財産の多くを公共のために寄付したこと。経営感覚に優れた感性を持つていた一面や、明治神宮の杜の設計にあつて百年の計をもつて造り上げた洞察力と林学に対する信念の強さなどが語られるとともに、博士の人生訓「人生即努力、努力即幸福」についても博士が天才肌ではなく努力の人であつたことがのべられました。講演の結びには、菅蒲町の本多静六博士を記念する会の取組み、名譽町民などに対し心からの感謝の気持ちをのべられておられました。

引き続き、環境音楽家の小久保隆氏の音楽演奏に合わせた森の映像「森の響」が演奏上映されましたが、映像を見ながら生演奏を聞くという驚きと森の素晴らしさを感じ取ることができました。

最後のパネルディスカッションは「明治神宮と二十一世紀の森づくり」をテーマとして東京大学教授で建築家の内藤廣氏、宇都宮大学教授で森林生態・育林学研究室の谷本丈夫氏、俳優の柳生博氏、明治神宮林苑主幹の沖澤幸二氏の四名のパネラーと元NHK解説主幹で東京農工大学客員教授の齋藤宏保氏をコーディネーターに迎えて、現在砂漠化する地球にあつて、明治



明治神宮の一の鳥居 菖蒲町ゆかりの橋に
触れて説明を聞く(本多静六ゆかりの地訪問)

神宮の社は環境モデルのひとつとして多くのことを示唆してくれている。つまり人の手によって造られた明治神宮の杜の自然の美が私たち人間に教えてくれているものは何か、これから二十一世紀の森づくりはどうあるべきなのか、四人のパネラーからそれぞれの考え方、あるべき姿などが発表されましたが、なかでも心に残ったフレーズは「森の匂いを聞いてみよう!」、「若い人に呼びさます感性と自意識」でした。

明治神宮の杜が次世代のための森づくりのあり方、生活環境の大切さを教えてくれていると同時に、菖蒲町の偉大なる先人本多静六博士の偉業に「今の世に是非とも必要な人」として感じた意義あるセミナーでした。

ゆかりの地訪問に随行して

本多静六博士を記念する会長 小山千秋

「本多静六ゆかりの地訪問」の四回目は平成十六年九月二十九日、昨年と同じく日比谷公園、明治神宮、NHKのコースで実施された。参加者三十五名に随員が加わり八時に役場を出発し、九時三十分、日比谷公園に到着した。東京都公園緑地部の二名の方のお出迎えを頂き、紹介、あいさつの後、早速、移動教室が始まった。大音楽堂前から雲形池に向かい、公園の歴史から博士の苦勞された設計や、当時の財政事情等を聞く。目の前に古めかしい立派な鶴の噴水がある。当時は如何に高価であったか。百年もの間、口から水の糸を吐き続けているが、第二次大戦後、公園は進駐軍に接収され、この池には床が張られてダンスホールになったという話を聞き一同嘩然として喚声。勝手極らないが、文化財を破壊しなかつたのは、せめても、と思いつながら足を運ぶ。池畔を過ぎると妙な水飲みがある。水は止まり単なるモニュメントになっているが、中世ヨーロッパの都市には欠かさない施設であった。今でも古い街並みで見かけることがある。説明によると人馬両用の水飲みで、当初はこの上に三〜四mの彫刻を施したボールが立ち、大変豪華なものであったがいつの頃からか上半分が消失したとのこと。博士は木は大きくなるから小苗でよい、と言って植栽したそ



「日比谷公園之光景」(大正6年)
雲形池と鶴の噴水(提供・井口金男氏)

うである。成長した樹林をぬけると有名な「首かけイチョウ」がある。

説明を聞いている中に、四百年の老木が、晩年の静六翁と重なるように見えて来る。松本楼から流れるカレーの匂いを後に第一花壇に向かう。

明るい芝生が開けた。日本人が初めて見た洋風花壇である。古色蒼然として心が和む、シユ口、ユツカ、カンナ、バラ、ゼラニウム等が当時の面影を止めているからである。

裏手にある旧公園事務所は老朽化して閉鎖されているが、明治時代の洋風建築として都の有形文化財に指定、保護されている。

第二花壇は本園のメイン施設で、南の大公会堂から芝生広場、大噴水、小音楽堂、第一花壇が一直線上に配置され、しかも左右対称にデザインされたヨーロッパ風（フランス式・平面幾何学式）の花壇で、当時としては奇想天外、今でも都心唯一の胸の透く広場である。

更に心字池の辺りを抜けて旧日比谷見付跡を最後に見学を終了した。

昨年は開園百周年に当り、日本公園史上に残る本園の姿と意義が改めて称えられた。都は歴史遺産として、原形のまま保存管理を続けることである。

車は明治神宮へ向かう、降りる頃には雨模様になる。表参道正面大鳥居の右手には、河原井の折原家隣家（吉野家）から、左手には幸手市の親戚（金子家）から、若者たちが大八車で運んだといわれる楠の大木が対に植えられ荘厳な趣を呈している。

雨のため森の見学は社殿に至る参道からにした。大都市の公害に耐えて九十年、シイ、シラカシ、クスノキ、サカキ等常緑広葉樹が生き残り、立派な照葉樹林を形成している。降りしきる雨は、樹下に厚く積った落葉に滲みてきれいな流れとなり橋の下を横切っている。神宮の森は博士に選ばれた公害優等生の木で構成された照葉樹林である。

車はNHKに向かった。放送センターでは係の丁寧な出迎えを受け、スタジオパークや「ためしてガッテン」のスタジオを始め、見学コースに沿って親切に案内された。アナウンス体験コーナーで、S氏が登場し、テレビ画面に映る一幕もあった。放送は裏から見れば、科学と技術のマジックであることがよくわかった。バスは六時に役場へ戻り、有意義な訪問見学が無事終了した。



日比谷公園での見学 興味深く水飲みを見る

編集後記

本通信や「本多静六の軌跡」にもご寄稿を頂いた大分県在住の木谷文弘氏の著書『由布院の小さな奇跡』が昨年末、新潮社から出版されました。木谷氏は元県庁職員で、自らの豊かな経験を基に「木谷ムラマチ計画研究室」を主宰し、まちづくりについて積極的な提言をされている方です。本の定価は七百円、帯封には「トップブランド温泉地はいかにしてつくられたか？」の文字が踊っています。この中で木谷氏は、本多静六について触れ、由布院の若者たちは、今、改めて、本多の『由布院温泉発展策』の実現に向ってがんばっている」と結んでいます。本の評判は上々で、女性週刊誌にも取り上げられたほどです。本多静六と由布院の関係がよくわかる本として、是非一読をお勧めします。

さて今回は、依先生には室蘭公園について、また遠山先生には「本多静六の足跡」取材ごぼれ話についての玉稿を賜りました。それぞれご専門のお立場にありながら、大変親しみやすく、分かりやすい文章をお書き頂きましたことに感謝申し上げます。本通信がご専門の方から初めて本多静六を知る方にまで広く読まれますことを願っております。

記念する会では皆様からの通信へのご意見、ご感想をお待ちしております。

【編集発行】本多静六博士を記念する会

〒346-1019 埼玉県葛蒲町新堀 38

葛蒲町役場企画財務課内 電話0480(85)

1111(代) FAX0480(85)6943